



土浦日大に敗れ、引き揚げる八戸学院光星ナイン＝甲子園

ベンチ20人 増える交代

選手層の厚さ、より重要に

21日に準決勝が行われる全国高校野球選手権大会は、障害予防や暑さ対策のため、ベンチ入りできる人数が従来の18人から20人になった。各チームの1試合あたりの平均出場人数は前

回大会の約12・2人から、今年は約13・3人へ増加。積極的な代打や代走、継投が増している。

八戸学院光星は19日の準々決勝で5人の代打を送り、投手交代も2度行った。

土浦日大(茨城)に敗れたが、仲井監督は「それだけ使っても、ベンチにまだ選手を残しておけた。結果は出なかったけど、思い切った起用ができる」と前向きに受け止めた。

仙台育英(宮城)は昨夏、1試合あたり14・6人を起用して日本一に輝いた。もともと積極的に交代させる須江監督。「守備のスペシヤリスト1人と、代打要員の枚数が1枚増えた。瞬間、瞬間で職人的な選手を起用できる」という今大会はここまで平均15人を試合に投入した。中盤までに大きくリードした花巻東(岩手)との準々決勝でも控え選手を守備、代打、継投に次々と出した。

一方、絶対的なエースを軸とした徳島商は1回戦を9人で辛勝し、2回戦は10人で戦って敗れた。森影監督は「1人の投手で戦い抜く難しさはもちろんある。でも県立高校はせいたくが言えない。その中でやっていかないと」と話す。49校が酷暑の中、2週間あまりで頂点を争う。ベンチ入りの枠が拡大し、勝ち上がるには、選手層の厚さがより重要となっている。